

# 赤十字国内スタディーツアー「国際活動体験ツアー in MISAWA 2016」の報告

佐藤沙織<sup>1)</sup> 齋藤和樹<sup>2)</sup>

## Report on the Red Cross domestic study tour “International Experience Tour in MISAWA 2016”

Saori SATO<sup>1)</sup>, Kazuki SAITO<sup>2)</sup>

---

1) 日本赤十字秋田短期大学 2) 日本赤十字秋田看護大学

1) Japanese Red Cross Junior College of Akita

2) Japanese Red Cross Akita College of Nursing

## I. はじめに

日本赤十字社（日赤）の国際活動要員の養成研修の多くは、1週間程度の宿泊研修で講義は全て英語で行われている。英語の研修はハードルが高いため、大阪赤十字病院（国際医療救援部）は、国際救援に興味を持つ看護師の動機づけのために日本語による「国際救援模擬体験ツアー」を開催している。2008年に大阪赤十字病院から看護学生も参加できるので、本学の看護学生にも案内してほしいとの依頼があったが、案内と募集が始まった当日に定員に達するという人気ぶりであったため、看護学生が参加するのは困難であった。

そのため、大阪赤十字病院は、2009年から看護師の研修とは別に「看護学生のための国際医療救援体験ツアー」（一泊二日）を開催するようになり、毎回本学の学生も参加している。しかし、定員24名と少ないのに対して非常に人気があり、本学の希望者が全員参加できなかったことがない。2013年は本学から13名応募したが、選抜の結果8名しか参加できなかった。13名もの参加希望者があったのは、本学の学生の国際救援への関心の高さを示していると思われるが、5名の参加希望者が参加することができなかった。

そこで、研修へ参加できなかった学生の国際救援活動へのモチベーション維持のために何かできないかと本学と日赤青森県支部が相談した結果、三沢航空祭にあわせて2014年に日赤青森県支部主催で計画したのが「国際活動体験ツアー in MISAWA 2014」で、今回のスタディーツアーの発端となるものである。初回の参加者は本学の学生9名（看護学科6名、介護福祉学科3名）であった。講師は、国際活動の経験豊富な日赤青森県支部の吉川靖之氏、日赤大阪府支部の森尚正氏、埼玉県赤十字血液センターの宮本教子氏であった。翌年も「国際活動体験ツアー in MISAWA 2015」が青森県支部主催で企画され、本学の赤十字国内ツアーの位置づけにした。参加者は、看護学生6人であった。講師は、前回に引き続き日赤青森県支部の吉川靖之氏、日赤大阪府支部の森尚正氏、埼玉県赤十字血液センターの宮本教子氏であった。

今年度は、本学で予算化し本学の赤十字地域交流センター主催の行事として、日赤青森県支部には共催を依頼した。内容と講師については本学と日赤青森県支部とで協議し決定した。本格的に本学の行事として位置づけられたので、ここにその報告をする。

## II. 目的・日程・参加者

### 1. 目的

- 1) 赤十字の国際活動について理解を深める。
- 2) アメリカ赤十字社三沢基地支部を訪問し交流をする。

### 2. 日程

2016年9月10日(土)～9月11日(日) 一泊二日

### 3. 研修場所

三沢市国際交流教育センター  
三沢基地

### 4. 参加者

看護学部4年生2名、3年生3名、2年生1名、1年生11名、介護福祉学科1年1名の計18名である。引率者は、佐藤と齋藤の2名である。他に本学の柳生文宏准教授が参加した。

### 5. 講師

吉川靖之氏（日赤青森県支部青森県支部 事業推進課 事業推進課長）

古田昭彦氏（石巻赤十字病院 乳腺外科部長  
プレストセンター長）

苫米地則子氏（日赤医療センター 国際医療救援部 看護師長）

宮本教子氏（埼玉県赤十字血液センター 事務部企画課 企画二係長）

後藤嘉世子氏（石巻赤十字病院 看護師）

## III. 研修内容

ツアーの日程と内容を表1にまとめた。秋田駅

表1 ツアー日程

9月10日(土)		9月11日(日)	
9:12	秋田発 こまち14号	7:00	起床
10:48	盛岡到着	8:40	会場発
10:59	盛岡駅発 はやぶさ7号	9:00	三沢基地着
11:26	八戸着	9:30	研修5
	マイクロバスで移動		三沢基地 航空祭
12:30	会場着・受付		American Red Crossを探せ!
13:00	研修1		ブルーインパルス展示飛行見学
	・国際救援活動について(吉川)	15:00	三沢発 マイクロバスで移動
13:30	研修2	16:00	八戸駅着
	・国際救援活動の実際	17:06	八戸発 はやぶさ 28号
	IFRC mission(古田)	17:44	盛岡到着
	ICRC mission(苫米地)	18:35	盛岡駅発 こまち27号
15:20	研修3	20:13	秋田駅着 解散
	Raid Cross(Humanitarian Assistance)		
16:30	三沢基地航空祭 前夜祭へ移動		
17:00	前夜祭会場(Sky Plaza着)夕食		
19:00	前夜祭発		
19:20	会場着		
19:30	研修2(続き)		
	・国際救援活動の実際		
	二国間事業(後藤)		
20:00	研修4		
	国際活動へ参加するには(宮本)		
	まとめ		
21:00	撤収		
	懇談		
	フリー(入浴等)		
23:00	就寝		

に集合して、秋田新幹線に乗り、盛岡駅で北海道新幹線に乗り換え八戸駅まで移動した。なお、岩手県の学生は盛岡駅で、青森県の学生は八戸駅や三沢市国際交流教育センターで合流した。講師の吉田氏、宮本氏、後藤氏も八戸駅で合流した。八戸駅から三沢市国際交流教育センターまでは、吉川氏の運転によるマイクロバスと青森県支部職員の田澤達也氏と後藤美咲氏が運転する青森県支部の車両に分乗して移動した。

研修会場の三沢市国際交流教育センター到着後、開会式を行い早速研修にはいった。(以下写



写真1 開会式で宮本氏を紹介

真については、全て本人の承諾を得て掲載している。) 研修1では、赤十字の国際活動について概論的な話を吉川氏から講義していただいた。吉川氏は、イラン南東部地震救援事業(2004)、スマトラ島沖地震(2005)の救援事業と復興支援事業、東ティモール赤十字社救急法等講習普及支援事業(2007)、ミャンマー・サイクロン被災者救援事業(2008)、ハイチ大地震救援事業(2010)、フィリピン台風災害救援事業(2013)などを経験したベテランである。そこで、赤十字の国際活動には、赤十字国際委員会(International Committee of Red Cross: ICRC)の紛争救援事業、国際赤十字赤新月社連盟(International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies: IFRC)の自然災害救援事業、二国間事業があることなどの説明を受けた。



写真2 研修1での吉川氏の講義

研修2で赤十字の国際活動の実際について派遣経験者から経験談を聞いた。まず初めに、IFRCの派遣経験について、古田医師からスマトラ島沖地震津波被害(2005)とハイチ大地震被害(2010)における基礎保健型緊急対応ユニット(Basic Health Care Emergency Unit: BHC-ERU)での医療救援活動の経験を伺った。古田医師は、有珠山噴火災害救護(2000)をはじめとする国内外の災害医療救護のベテランである。東日本大震災では、勤務している石巻赤十字病院で不眠不休の活動をしている。また、今年発災した熊本地震(2016)でも医療救護活動を行っている。インドネシアでは、第5班で巡回診療活動後、インドネシア赤十字社やムラボ県立病院へ資材を引き渡し帰国直前に新たな地震が発生し、残留して医療救護活動をしたという。ハイチでは、派遣が決まったときにパスポートの期限切れに気づいたという失敗談やドイツ赤十字社の病院型ERUに派遣され、乳腺外科が専門である古田医師が日本では普段行わないような手術まで経験したという話を伺った。そして、なぜ災害医療に取り組むのかということについては、日本でも多くの巨大地震が予想されていて、他人事ではないからとまとめられた。

次に、ICRCのミッションについて苦米地看護師長から経験談を伺った。苦米地看護師長は三沢市出身で、スーダン紛争犠牲者救援(ICRC)(1997)、コロンビア地震被災者救援(1999)、ト



写真3 研修2での古田医師の講義

ルコ地震被災者救援（1999）、インド地震被災者救援（2001）、アフガニスタン医療復興支援事業（ICRC）（2003）、アフガニスタン・ミルワイズ地域病院支援事業（ICRC）（2009）、チリ大地震救援（2010）、パキスタン北部紛争犠牲者救援事業（ICRC）（2012）、フィリピン南部台風災害救援事業（ICRC）（2012）、ウガンダ北部医療支援事業（2014）、ネパール地震救援事業（2015）を経験したベテランである。苫米地看護師長は、自身初めてのミッションであるスーダン紛争犠牲者救援と印象深く記憶しているアフガニスタン・ミルワイズ地域病院支援事業のふたつの経験を話された。初めての海外派遣となったスーダン紛争犠牲者救援では、2013年に映画化された「風に立つライオン」の舞台となったケニアのロキチョキオのICRC戦傷外科病院でカルチャーショックを受けながら夜勤を含む6ヶ月間の病棟勤務を経験されたそうである。この派遣経験で「生きる価値観の変化」が生じたということであった。アフガニスタンの病院支援事業は、「治安上の規則として外出禁止、病院への通勤は必ず車両を使用することになっていました。たとえ45秒の通勤でも必ず守らなければなりません。病棟勤務も時間厳守の日勤のみで、限られたなかでの活動には工夫が必要でした。このような厳しい環境での活動を支えるよう、食・住はICRCによって整えられ、定期的に休暇をとり気分転換を図ることも大切な活動のひとつでした。」と話されていた。



写真4 研修2での苫米地看護師長の講義

研修3では、「Raid Cross」を行った。「Raid Cross」は、2005年にフランスとベルギーの赤十字社において開発され、ICRCも普及に力を入れている教材である。様々なチェックポイントでロールプレイを楽しみながら、武力紛争時の人道上の問題について理解を深めることができるゲームである。このゲームでは、さまざまなテーマを扱うことができるが、今回は「人道支援（Humanitarian Assistance）」を取り上げた。まず、数名のグループに分かれ、グループの一人が地雷原（両側においた椅子の脚をテープでつなぎ歩みにくくした上に、目隠しをし、ペットボトルを地雷に見立てる）をスイカ割りの要領でグループメンバーの指示を聞きながら、ダンボール箱に入った赤十字の救援物資を運ぶ。



写真5 RAID CROSSで地雷原を通るところ

地雷を踏めば減点になり、メンバーはスタート地点に戻り交代する。時間を争うゲームでもある。地雷原を無事通過すると、武装した兵士（この兵士役は吉川氏と古田医師が演じた）がいて英語で話しかけてくる。「お前たちは何者か」、「どこへ行くのか」、「その箱には何が入っているのか」、「我々にその物資を分けてくれないか」などの質問に英語で答えなければならない。さらに、兵士のボスが出てきて、「私たちを赤十字の車両に乗せてほしい」、「ここは危険だから、私たちが先導して警護してあげよう」、「軍のタイヤを赤十字の車両で運んでくれないか」などの申し出をしてくる。また、日本のNGOを名乗る人たち（宮本氏と苔米地氏が演じた）が「赤十字の車両に乗せてほしい」と申し出てくる。現地の赤十字社のエン

プレムをつけ、ボランティアだと名乗る人たち（4年生の学生2名が演じた）が「自分たちの車両が壊れたので、車に乗せてほしい」、「自分たちの物資を運んでほしい」などと訴えてくる。



写真6 武装した兵士たちとの交渉



写真8 日本のNGOと名乗る人たちとの交渉



写真9 現地赤十字社のボランティアと名乗る人たちとの交渉



写真7 兵士のボス登場

これらに対して、赤十字の原則に基づいてどのように対応するのかということを競うゲームでもある。チーム対抗で争い、勝ったチームには賞品が与えられた。

夕食は、三沢基地前のSky Plazaでの自由行動として食事をとった。それぞれ、思い思いの場所で食事をしたあと、アメリカのお菓子や飲み物、米軍基地の放出品などの店でショッピングを楽しんだ。

夕食後は、研修2の続きとして、フィリピンとの二国間事業で活動して7月に帰国したばかりの後藤看護師から話を聞いた。後藤看護師は、この派遣が初めての派遣だそうである。派遣先は、フィリピン共和国ヌエヴァヴィスカヤ州カヤパ郡であった。事業地は、保健医療施設から遠いうえに交通事情も悪く、十分に保健医療サービスを受けることが困難な地域で、そこでの活動は、「赤十字の普及活動」、「健康教育」、「小学校の給水衛生設備アセスメント」、「村のヘルスステーションアセスメント」であった。そこでは、看護業務を行うのではなく、プロジェクトを実施するということであった。後藤看護師は、国際活動をするうえで大切だと思うこととして、「コミュニケーション力」、「チームワーク」、「国際活動に関する知識」をあげていた。そして、「世界中にはたくさんの仲間がいます。赤十字を通じてネットワークを広げよう!!」と学生に対してメッセージをくれた。自身の初めてのミッションについては、「国際活動は楽しい。また行きたい」と述べた。



写真10 研修4での後藤看護師の講義

研修4では、日赤本社国際部で要員を海外に派遣する立場にあったこともある宮本氏が「国際活動に参加するには」どうしたらよいかについて講義をされた。宮本氏もまた、国内外の派遣経験を持つ。自身の海外派遣はイラン南東部地震救援(2004)、スマトラ島沖地震救援(2005)、チリ大地震救援(2010)などである。図1のように、「国際救援・開発協力要員研修I(WORC)」や「基礎保健型ERU研修」、「国際救援・開発協力要員研修II(IMPACT)」などの研修があり、自分がどういう形で国際活動をしたかによって研修を

選ぶ必要があることが説明された。さらに、海外派遣登録がなされた後も分野別研修を含むさまざまな研修があることが話された。そして「世界があなたを待っている」と学生へのメッセージを送られた。

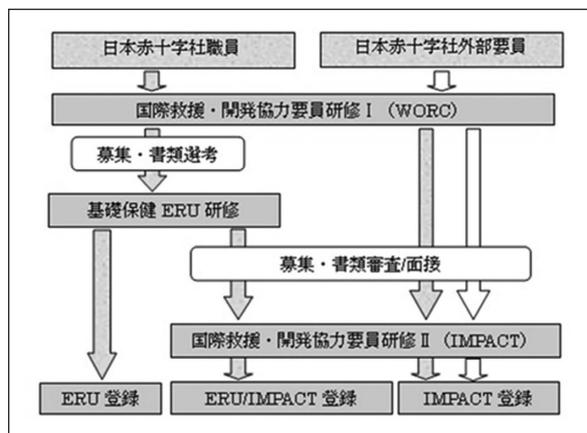


図1 国際活動に参加するための研修

一日目の研修が終わった午後9時以降も談話スペースに場所を移動し、お菓子などを食べながら11時ころまで講師の方々との交流は続いた。学生の中からは、「国際活動をするためにはどこの赤十字病院へ就職するのがよいか」などの質問もあった。

二日目は、三沢航空祭に出かけた。天候が心配されたが、幸いよい天気恵まれた。入場時間の関係が過去2回の航空祭では見られなかったほどの人出で、入場ゲートにたどり着くまで小一時間ほど長蛇の列に並んだ。入場ゲートでは、荷物のチェックが行われた。会場までは、そこからさらに30分ほど歩いた。途中、米兵と楽しそうにポーズを取る学生たちもいた。

研修5では、「アメリカ赤十字社を探せ!」という課題で、広い会場でどうなることかと心配もあったが、昨年と同じ場所にテントをはってしてくれたために比較的簡単に見つかった。今年は、アメリカ赤十字社は、「迷子センター」として機能していた。隣には、米軍の救護所もあり、赤十字マークをつけた米兵もいた。米兵の乗っている電動カートに座らせてもらう交渉をして一緒に写真に収まる学生もいた。少しの間アメリカ赤十字社のスタッフと交流し、記念撮影をした。アメリカ赤十字社のRegional Program SpecialistであるAlesia Younes-Cooper氏からは、「さまざまな協力ができると思うので、三沢に来たときには、いつでも事務所に寄ってください」と言ってもらった。



写真11 アメリカ赤十字社のテント前で  
(前列右端がAlesia Younes-Cooper氏)

メールアドレスの交換をし、後日お互いに撮った写真の交換をした。当日のアメリカ赤十字社三沢基地支部のFACE BOOKには、我々の訪問が写真とともに掲載された。

アメリカ赤十字社との交流の後は、各自自由に屋台の食べ物を食べたり、買い物を楽しんだ。米兵の家族が出店しているところも多く、英語でも買い物を楽しんだ。また、展示されている飛行機を見学した。去年は、雨のため見られなかったブルーインパルスの飛行を今年は楽しめた。帰りの時間や混雑を考慮してブルーインパルスの飛行を見学した後に、三沢基地を後にした。



写真12 ブルーインパルスの飛行

三沢基地を出たところで三沢市等に自宅がある学生は解散し、他の参加者は、吉川氏運転のマイクロバスと青森県支部の車両で八戸駅に向かった。八戸市に自宅がある学生は、八戸駅で解散となった。八戸駅では講師の方々ともお別れをし、新幹線で盛岡駅に向かった。盛岡駅で岩手県の学生は解散し、秋田新幹線で秋田駅に20時13分に

無事到着し、解散となった。



写真13 三沢市国際交流教育センター

#### IV. 評価

このツアー実施に際して、7月25日にオリエンテーションを実施し、ツアー実施後の10月14日に全学を対象とした報告会を行っている。報告会の際には、参加者へ質問紙による振り返りと評価を実施しているため、次にそのことについて報告する。

参加者18名中ツアー後の報告会に出席できた14名に対し、質問紙を実施した。調査対象者に対して調査の趣旨、協力への自由意思の保障、匿名性の保持について口頭にて説明した。また、個人が特定される恐れがないことについて説明をした。

質問紙の内容は、1.『研修1 国際救援活動について(概論)』、2.『研修2 国際救援活動の実際(IFRCミッション・ICRCミッション・二国間事業の体験談)について』、3.『研修3 RAID CROSS(ゲーム)について』、4.『研修4 国際活動に参加するには(どのような研修や準備が必要か)』、5.『研修5 三沢基地航空祭でAmerican Red Crossを探せ(航空祭見学と米赤との交流)』、6.『ツアー全体の内容について』、7.『研修時間について』、8.『来年度もスタディーツアーに参加したいか』、9.『ツアーを友人に勧めるか』、10.自由記述1)全体を通し印象に残っている研修内容、2)ツアーに参加して、得たこと、学んだこと、3)ツアーについての意見・感想、4)今後受けてみたい研修内容とした。設問1～5については、参考度(大変参考になった、参考になった、どちらともいえない、あまり参考にならなかった、全然参考にならなかった)とツアーの継続について(今後も続けて欲しい、できれば続けて欲しい、どちらともいえない、そんなに続けて欲しいと思わない、続けなくてもよい)評価してもらうこと

とした。また各項目に自由記述を設けた。

研修1『国際救援活動について(概要)』(図2-1、図2-2)では、「大変参考になった」11名(78.6%)、「参考になった」3名(21.4%)であった。継続については、「今後も続けて欲しい」12名(85.7%)、「できれば続けて欲しい」2名(14.3%)であり、好評であった。

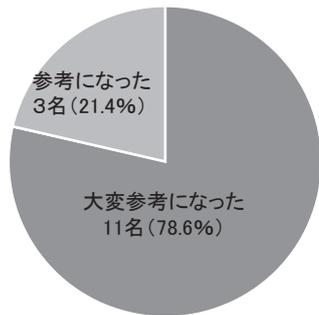


図2-1 研修1「国際救援活動について(概論)」  
参考度 n=14

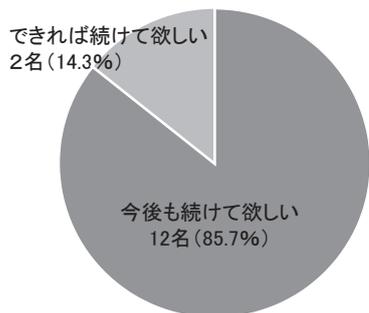


図2-2 研修1「国際救援活動について(概論)」  
継続について n=14

研修2『国際救援活動の実際(IFRCミッション・ICRCミッション・二国間事業の体験談)』(図3-1、図3-2)では、「大変参考になった」12名(85.7%)、「参考になった」2名(14.3%)であった。継続については「今後も続けて欲しい」13名(92.9%)、「できれば続けて欲しい」1名(7.1%)であった。国際活動の実際の具体的な話で、大変好評であったことがわかる。

研修3『RAID CROSS(ゲーム)について』(図4-1、図4-2)では、「大変参考になった」10名(71.4%)、「参考になった」3名(21.4%)、「どちらともいえない」1名(7.1%)であった。継続については、「今後も続けて欲しい」11名(78.6%)、「できれば続けて欲しい」1名(7.1%)、「どちらともいえない」2名(14.3%)であった。自由記

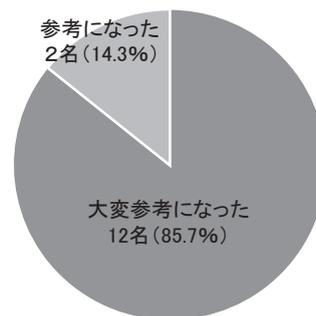


図3-1 研修2「国際救援活動の実際について」  
参考度 n=14

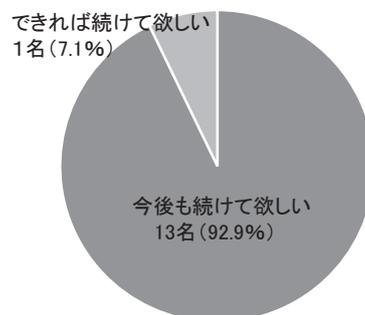


図3-2 研修2「国際救援活動の実際」  
継続について n=14

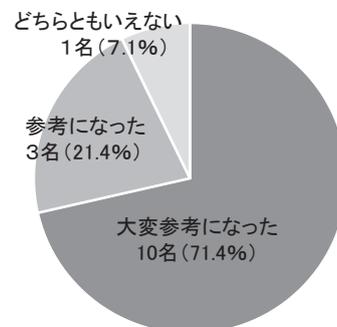


図4-1 研修3「RAID CROSS(ゲーム)」  
参考度 n=14

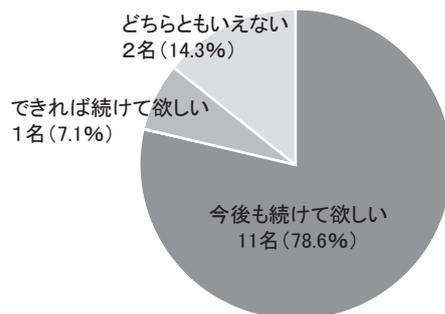


図4-2 研修3「RAID CROSS(ゲーム)」  
継続について n=14

述として、「楽しく学びながら赤十字の原則について考えられたのでとてもよかった。他のシチュエーションも体験してみたいと思った。」(1件)が挙げられた。初めての試みであり、学生たちの笑顔が見られたゲームであったが、役割により参加度が多少異なるので、ゲーム展開にさらなる工夫の必要もあると考えられる。

研修4『国際活動に参加するには(どのような研修や準備が必要か)』(図5-1、5-2)では、「大変参考になった」9名(64.3%)「参考になった」4名(28.6%)、「あまり参考にならなかった」1名(7.1%)であった。継続については「今後も続けて欲しい」11名(78.6%)、「できれば続けて欲しい」2名(14.3%)、「どちらともいえない」1名(7.1%)であった。学生も知っておくべき研修についての内容であるが、看護師になってからの研修が主になるため、学生にとっては、少し遠い研修の話と受け止められたようである。これらの研修の準備として学生時代に何をしておけばよいか、講師の方々も学生時代にどのような準備をしたかなど、学生に引きつけた内容の話を加える必要があるかもしれない。

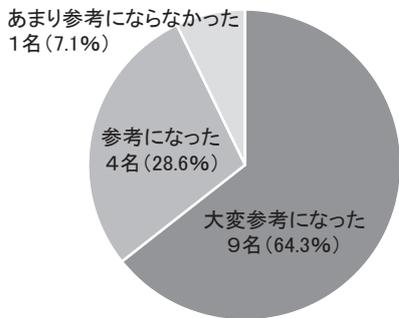


図5-1 「国際活動に参加するには(どのような研修や準備が必要か)」参考度 n=14

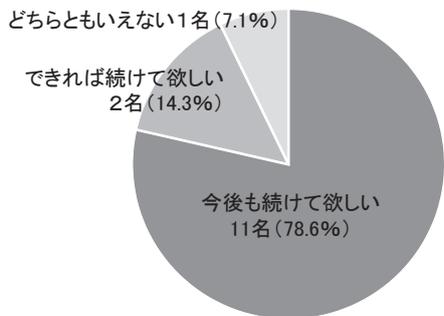


図5-2 「国際活動に参加するには(どのような研修や準備が必要か)」継続について n=14

研修5『三沢基地航空祭でAmerican Red Crossを探せ(航空祭見学と赤米との交流)』(図6-1、図6-2)では、「大変参考になった」7名(50%)、「参考になった」5名(35.7%)、「どちらともいえない」1名(7.1%)、「あまり参考にならなかった」1名(7.1%)であった。継続については、「今後も続けて欲しい」9名(64.3%)、「できれば続けて欲しい」3名(21.4%)、「どちらともいえない」1名(7.1%)、「そんなに続けて欲しいと思わない」1名(7.1%)であった。自由記述では、「もう少し活動を見せてもらいたいと思った。」(1件)、「基地の騒音がどれくらい大きいのかわかって、基地問題について考えるきっかけになった。American Red Crossともう少し交流したかった。」(1件)が挙げられた。

開催時期や場所として、必ずしも三沢航空祭に合わせなくてよいのかもしれないと考えられる。アメリカ赤十字社との交流も時期をずらすことによって、もっと時間を取ることができるかもしれない。

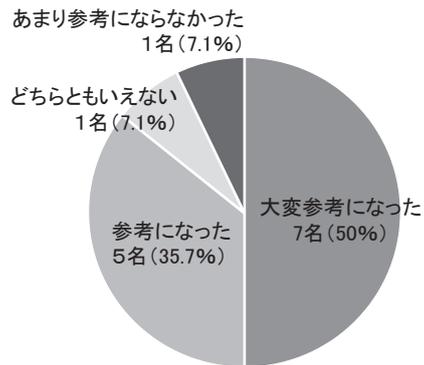


図6-1 研修5「三沢基地航空祭でAmerican Red Crossを探せ(航空祭見学と赤米との交流)」参考度 n=14

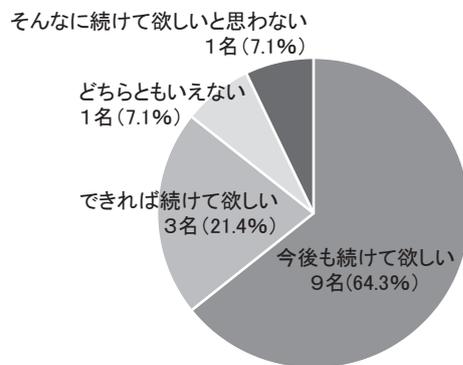


図6-2 研修5「三沢基地航空祭でAmerican Red Crossを探せ(航空祭見学と赤米との交流)」継続について n=14

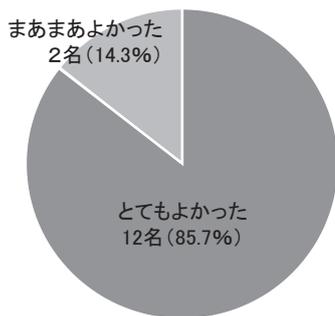


図7 ツアー全体の内容について n=14

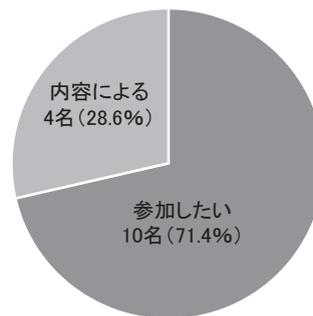


図9 来年度も参加したいか n=14

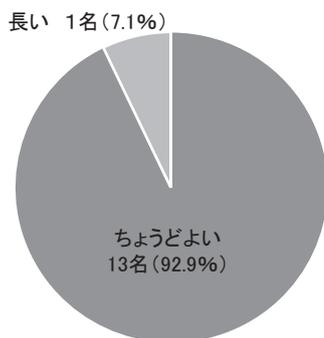


図8 研修時間について n=14

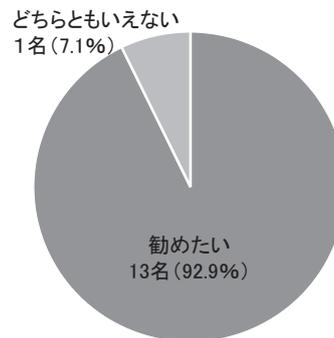


図10 研修を友人に勧めたいか n=14

『ツアー全体の内容について』(図7)は「とてもよかった」12名(85.7%)、「まあまあよかった」2名(14.3%)であった。「あまりよくなかった」、「全くよくなかった」と回答した学生はいなかった。『研修時間について』(図8)では、「ちょうどよい」13名(92.9%)、「長い」1名(7.1%)であっ

た。『来年度もツアーに参加したいか』(図9)について「参加したい」10名(71.4%)、「内容による」4名(28.6%)であった。『友人に勧めたいか』(図10)については、「勧めたい」13名(92.9%)、「どちらともいえない」1名(7.1%)であった。

自由記述(表2)で『全体を通して印象に

表2 自由記述

全体を通して印象に残っている研修内容	
国際救援活動に関する講演	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生の体験談</li> <li>国際活動について講師の先生のお話を聞くことができ、国際的な活動についての興味が高まった。</li> <li>ハイチなど実際に海外で活躍している方々のお話、全てが興味あることでとても聞いていて楽しかった。</li> <li>実際に現地で活動した際の対応、現地の人達とのかかわり方とか楽しく学べた。</li> <li>実際に派遣経験のある方の話を聞くことはなかなかできないので、様々なことを聞けて勉強になった。</li> <li>国際救護活動について現場での経験がきけてよかった。</li> <li>国際援助活動のお話がとても為になりました。興味がわきました。広い視野を持つことができたと思う。</li> <li>ICRCやIFRCのミッションに参加した方のお話を直接聞くことができたのがとても印象に残った。</li> </ul>

RAID CROSS について	<ul style="list-style-type: none"> <li>RAID CROSSが楽しかった。英語を話す良い機会だし、赤十字のことを学ぶことができてよかった。</li> <li>研修3のゲームがとても良かった。身をもって赤十字について考え、知識を深めることができた。</li> <li>ゲームでいろんなパターンの問題が出されましたが海外で活動するということは本当に大変なことなんだと実感した。</li> </ul>
三沢航空祭について	<ul style="list-style-type: none"> <li>航空祭がなかなか経験できないことだったのでよかった。</li> </ul>
ツアーに参加して、得たこと、学んだこと	
救護活動に必要なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に派遣されて活動してきた方のお話を聞くことができなかったのが、国際活動の内容を少しでも知ることが嬉しかったし、さらに興味を持った。</li> <li>体験談が説得力があって参考になった。医師の話がおもしろかった。</li> <li>異文化を尊重することが救護活動にいかにか大切か</li> <li>赤十字の活動や海外でどのようなことをし、そのために何が必要かなどを知ることができ、とても為になった。</li> </ul>
語学の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>まず、語学が大切だと思った。また海外で活躍するにはこの4年間と就職後の自分の仕事を大切にする必要があると学んだ。</li> <li>ミッションに参加するため、より英語を学ぼうと思いました。また、学ばなければ参加しても活躍できないと分かりました。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際にAmerican Red Crossの人と写真をとれてよかった。</li> <li>赤十字社が行っている活動をよく知ることができた。</li> </ul>
ツアーへの意見・感想	
アメリカ赤十字との交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>アメリカの赤十字の人との交流時間をもっととって欲しい。</li> <li>アメリカレッドクロスや実際に活動してきた方と交流する場面がもっと増えたら良いなと思った。</li> </ul>
海外での活動への意欲	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外で働きたいと改めて思った。</li> </ul>
今後受けてみたい研修内容について	
<ul style="list-style-type: none"> <li>国際救援に役立つ英語</li> <li>国際救援活動についての講話</li> <li>病院に就職してからどんなことをしていけばいいのか聞きたい。</li> <li>RAID CROSSを通し、赤十字についての学びを深めたい。</li> <li>他大学（日赤や国際救護について何らかの活動をしている大学）との交流をしてみたい。</li> <li>国際救護活動について講師の先生のお話をたくさん聞きたい。</li> <li>来年は実際に海外の人とコミュニケーションをとってみたい。</li> </ul>	

残っている研修内容について』では、「国際救援活動に関する講演について」（8件）、「RAID CROSSについて」（3件）、「三沢基地航空祭について」（1件）が挙げられた。『研修に参加して得たこと、学んだことについて』は、「救護活動に必要なこと」（4件）、「語学の重要性」（2件）、「その他」（2件）であった。『研修への意見・感想』では、「アメリカ赤十字との交流」（2件）、「海外での活動への意欲」（1件）であった。

『今後受けてみたい研修内容について』では「国際救援に役立つ英語」（2件）、「国際救援活動についての講話」（1件）、「日赤や救援活動について活動をしている他大学との交流」（1件）、「外国の方とコミュニケーションを図る」（1件）、「就職後の国際救援活動に参加するための準備」（1件）、「RAID CROSSを通した赤十字の理解」（1件）が挙げられた。

これらの結果から、参加した学生は概ね満足し、国際救援活動への関心が高まっていることが読み取れる。実際に活動されている方々の講話から具体的な活動の内容を知り、赤十字の原則の重要性や語学の必要性について認識を深めている様子であった。今後は、学生たちの希望も参考にさらによりプログラムに改善していきたいと思う。

## V. 終わりに

日赤青森県支部と講師の方々の全面的な協力を得て、今年度の本学の国内スタディーツアーが無事終了した。本学でも赤十字の国際活動に興味を持つ学生は少なくない。今回のツアーも当初26名の参加希望者がいたが、実習などの都合で参加をあきらめた学生もおり、最終的には18名の参加となった。しかし、この人数は、本学の行事となる前の2回よりも多い。また、今回は前年度のツアーに参加した学生も参加しており、看護学部は全学年からの参加であった。国際活動に関心を持つ学生が増えてきているのかもしれない。

今回は、日赤青森県支部、石巻赤十字病院所属の講師や三沢市出身の講師という東北にゆかりのある方々から国際活動の体験の実際をきくことができたのは、収穫であった。学生たちの評価も高かった。また、今回取り入れたRAID CROSSは、今後の可能性を感じさせる取り組みであったと思う。今回の講師たちとの話し合いの中では、東北にあるもう一つの日赤の看護師養成学校である石巻赤十字専門学校との共同開催という話も出た。今後も学生たちが国際的な活動に関心を持ち、継

続した学びができるようさまざまな形でサポートしていくことが重要と考える。

## 謝 辞

今回のツアーを支えてくださった日赤青森県支部の吉川靖之氏、田澤達也氏、後藤美咲氏、石巻赤十字病院の古田昭彦氏、後藤嘉世子氏、日赤医療センター国際医療救援部の苦米地則子氏、埼玉県赤十字血液センターの宮本教子氏には、あらためて名前を挙げて感謝申し上げます。

## 文 献

角田敦彦 (2015), RAID CROSS (レイド・クロス) 入道研究ジャーナル, 4, 209-266.